防人の唄

由良川成美

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

防人の唄

【Ｎコード】

Ｎ５８０３Ｗ

【作者名】

由良川成美

【あらすじ】

西暦二〇一八年。台頭する中国の軍事力に対抗するため、日本国国防軍とアメリカ合衆国太平洋軍による軍事演習が行われようとしていた。しかし、その陰では沖縄が、否、世界が戦慄する陰謀が進行中だった！　国防陸軍二等軍曹神埼聡は一一式人型戦車を駆り、沖縄に平和を取り戻せることができるのか！？

第一話（前書き）

誠にお待たせいたしました。
身勝手な自分の都合で皆様にご迷惑をおかけしたことを深くお詫び申し上げると共に、本編をお楽しみいただけますようよろしくお願いします。

第一話

神埼聡が広島県にある町に生まれたのは、北朝鮮（朝鮮民主主義人民共和国）で指導者が急逝した直後、朝鮮人民軍によるクーデターが勃発。

その後、実権を握った軍が暴走し、韓国に侵攻したのをきっかけに、第二次朝鮮戦争が勃発した一九九七年のことだった。

聡の生まれた町は数多くの観光資源に恵まれ、観光シーズンともなると、国内だけでなく海外からも観光客が訪れごった返す、そんな町だった。

小学校に上がってから三年前後の間、聡は父方の小田という姓を名乗っていた。

聡は父と母、そして妹の優との四人暮らしで、父は国防海軍の大尉だった。

第二次朝鮮戦争が勃発した際、日本は実働介入を宣言しながらも、朝鮮半島に陸海空三自衛隊を派兵することはせず、専ら米韓連合軍への物資援助や洋上給油にのみ参加するだけだった。

自らの手を汚すのは嫌だが、見て見ぬ振りをするのはさすがに気が引ける。という当時の日本政府の幼稚で身勝手な考えが反映された結果だった。

しかし、当時の北朝鮮は、米韓連合軍への軍事的援助を行った日本に対し、弾道ミサイルを撃ち込み、工作員や人民軍の特殊部隊による破壊作戦を実施した。

弾道ミサイルの弾頭に搭載されていた化学兵器は、何の罪もない日本の国民を虐殺し、工作員によって原子力発電所を破壊された東北地方では高範囲に渡って放射能による汚染が広がった。

そしてまだ、惨劇は続く。

一九九七年の末、ようやく北朝鮮との停戦が現実味を帯びてきた頃にそれは起こった。

福岡における武装難民団の上陸事件――通称「血のクリスマス事件」だ。
祖国での戦火から逃れる際、朝鮮人民軍から流出した火器で武装した彼らは殺人、強姦、略奪、放火、と暴虐の限りを尽くした。
やがて彼らは幾つかのコミュニティを形成し、それらは分裂と統合を繰り返していった。そして一つの組織が生まれることになる。
これが「朝鮮進駐軍」である。
朝鮮進駐軍は「朝鮮難民、在日朝鮮人を問わず、日本国内にいる全ての朝鮮人に対する公民権の付与」を名目に、後世に渡って数々のテロを繰り返していった。
この時の自衛隊は法律の壁に阻まれ、まともな治安活動を実施できず、あまつさえ自分たちの身を守ることすらおろそかだった。
結果、多くの日本人が犠牲になったのは言うまでも無いことだろう。

多くの血が流れてようやく目を覚ました日本はその翌年に憲法を改正し、国防庁を国防省へ、自衛隊を国防軍へと昇格、拡充した。
こうして日本は戦後半世紀以上を過ぎて初めて武力の保有と個別的、集団的を問わず自衛権を行使することを国内外に宣言したのであった。
そんな中、聡の父親は、自衛隊が国防軍へ昇格したことに伴う部隊再編に際して、陸海空の各部隊との調整役を任された。そのため日本全国の国防陸海空三軍の基地や駐屯地を駆けずり回った。
左が日本は永久に軍隊を放棄し、未来永劫の世界平和を希求するのではなかったのかと言えば、右は日本だけでなく、自国軍隊を保有し、自国の国土、国民、主権を守るのは、国家が持つ当然の権利だと言う。
そんな答えの見えきった議論が、国会やワイドショーで喧々諤々と盛んに行われ、それが日常的にお茶の間に流されている間、聡の父親だけでなく国防軍の軍人たちは「自衛隊」としてではなく「軍

隊」としての部隊運用の研究と実践に邁進していた。
多忙を極める国防軍の軍人たちが、そんな答えの見えきった議論に付き合える暇などなかった。
続々と導入される新兵器に新システムに、それを整備運用するための技術の習熟。
教える方も教えられる方も、何が何やら分からない中、多くの軍人が自分の家で待っている妻や子を思った。もちろんその中には聡の父もいた。
数多の艦艇や基地の中を駆けずり回り、たまの休みに帰ってくると、疲れた体に鞭を打ち、聡や優を連れて遊びに出かけるのが父の「任務」だった。
「この国に住んでいる人が思っているほど、世界は優しいもんじゃない。他の国の政治家や大統領みたいに偉い連中の中には、自分の国のことしか考えていない奴がいっぱいいる。でも父さんはそれが悪いことだとは思ってない。むしろ自分の国をないがしろにするような奴が、他の国のために何か出来る訳がないんだ。でも、もし他の国が自分の利益のために、日本に攻めてきたら父さんは戦うよ。相手の兵隊さんにも同じように奥さんがいて、聡や優みたいな子供もいるのかも知れない。でも、もう二度と戦争でこの国の人たちが死ぬのはごめんだし、何より母さんや聡や優を守るためなら喜んで相手の兵隊さんを殺――やっつけてやろうと思う。これは父さんだけじゃない。国防軍に入った人はみんな何か大切なものを守るためだけに毎日苦しい訓練をしてるんだ」
「なんで父さんが戦わなきゃいけないの？　父さんの他にも兵隊に行く人がいるのなら、その人たちに任せればいいのに」
まだ幼かった聡がそう尋ねると父は言った。
「確かに人任せにすれば楽だろうな。でもそうしていると、いつかは痛い目を見ることになるからな。それはできないんだ」
「……？」
聡は思わず首をかしげた。父は一体何を言っているのだろう？

父のその言葉を理解するには、少年はあまりにも幼かったのだ。
父はそんな聡の頭をわしわしと撫で、自分の背中で眠りに落ちている優を起こさないようにしながら、聡の手を引き、家路に着くのだった。

そんなある日、父は死んだ。
呉にある国防海軍の基地から家に帰る途中で「赤衛隊」と名乗る左翼系の過激派テロ組織に襲撃され、集団暴行にあった。
その際、負った脳挫傷が致命傷となり、病院へ搬送されたが、手の施しようがなかったとのことだった。
戦後半世紀を過ぎた今日までの間に自衛隊は、二件のクーデター事件を引き起こしていた。
そのため自称革命主義者による自衛隊並びにその後進に当たる国防軍の関係者に対する暴力事件や殺人事件が、日常的に起こっていたのだが、その頻度は憲法改正前後から右肩上がりで増加していった。
父が標的となったのに深い味はなかった。
政府の犬と化し、日本だけでなくアジア諸国の国民を弾圧し、それを正義と公言するその厚顔無恥さに憤りを覚えた――そんな幼稚な論理を書き連ねた犯行声明が、呉鎮守府の総監部に送りつけられてきたそうだ。
聡は納得がいかなかった。自分のためだけではなく、国民のために毎日、身を挺していた父が、どうして国民を弾圧していたのだ。
仮に国防軍が国民を弾圧し虐げているというのなら、中将や大将といった高級将校か、参謀総長のような要職者の首を獲った方がよほど効果的だろう。
しかし奴らが狙うのは、常に屈強な護衛のつく高官クラスではなく、兵卒や下士官、士官であっても重要な要職に就いているとは言い難い者ばかりだった。
早い話、奴らは自分の醜い暴力衝動を「国民を救う」という崇高なオブラートに包み、適当に発散しているだけなのだ。

――だいたい連中の言うアジア諸国とはどこの国のことなんだ。
聡は激しい憤りを感じたのだった。
病院から父の遺体を引き取り、葬儀の手続きをするまでの間、と大人たちは「子供にはとても見せられるものではない」と聡と優に父の死に顔を見せることはなかった。
聡はそんな大人たちの目を盗み、父の棺の中を見た。見せられるものではないも何も、息子である自分が、父の死に顔を見ることはできないと言うのは道理が通らないと思ったからだ。
聡は棺に収まった父と――父だった「物」と対面した。
頭は歪な形に変形していて所々が縫合されていた。昔、と言ってもほんの三か月前に見た映画「フランケンシュタイン」に出てくる怪物のようだった。
優しく力強かった父の面影など、微塵にも感じられなかった――否、聡は何も感じられなかった。聡は土気色に変色した父の冷たい肌に触れると、聡の目から初めて涙がこぼれた。
親戚にその現場を見咎められ、隣の部屋に連れて行かれるまで聡は、二度とぬくもりが戻ることの無い父の肌に自分の涙が落ちる音を聞いていた。
それから一年前後のことは、特に語る必要もないだろうが、強いて言うならば、母は夫である父に代わって二人の子供を養うために、県内にある出版社に勤め始めた。
優は以前の明るさが嘘のように口数の少ない暗い少女になってしまった。
聡はというと、父の生前と同じように学校へ行き、食事を取り、宿題をした。
変わったところと言えば、家計の負担を減らすために幼稚園の年長から通い続けていた空手の道場を辞めたことぐらいだ。
不思議だった。父が死んだ当初は家族みんなであれだけ泣き喚いたのに、今では涙が一滴も出なくなっていた。
悲しみの大きさは一ミリたりとも小さくなっていないはずなのに、

だ。月並みだが、まるで心に穴が開いてしまったようだった。

そんなある日、何気なく点けたテレビが赤衛隊のメンバーが別件で逮捕されたことを伝えていた。

テレビのアナウンサーによると、赤衛隊は過去に何度も破壊活動を繰り返しており、中でも今回、逮捕された連中は筋金入りのテロリストとして、公安警察だけではなく赤衛隊内部からも恐れられていた。

彼らが逮捕されたのは、東京の地下鉄で大規模な爆弾テロの計画が、赤衛隊内部から国内の治安当局にリークされたからだった。

しかし計画の一部は実行され、三〇〇強の死傷者を出していた。ここまでの悪事を働いたのだから死刑は確定だろうと、ブラウン管の向こうにいる識者は自論を展開していた。

そして、そのニュースを食い入るように見ていた聡は、思わず言葉を失った。

主犯格とされたのは、どう見ても聡より少し年上ぐらいの女の子だったのだ。

出自や、どうしてこの年で赤衛隊の幹部クラスに上り詰めることができたのか。何故か一切、マスコミ各社には公表されなかった。

しかし何はともあれ裁判が始まれば、父も完全にとはいかないだろうが報われるだろう。

自分たちと同じように大切な人を奪われた人たちも多少なりとも溜飲を下げることができるだろうと聡は思った。

どんな極悪人共でも有罪か無罪かを推し量らなければ、一三階段に送ることができない日本の法律に聡は疑問を感じたが、とにかく裁判が始まった。

最初のころは、世間を騒がせている集団とあって、マスコミが報道合戦を展開していたので、傍聴券の倍率は数十倍に膨れ上がってしまった。

母はもう少し、事件のほとぼりが冷めてから行こうと言った。

マスコミの取材に応じれば、傍聴券をもらうこともできたのだが、母は自分の子供たちが見世物になるのを拒んだのだ。

しばらくした後、聡たちは法廷へ足を運んだ。

犯人たちは法廷で口をそろえて、自分は悪くない、悪いのは国家のほうだと無茶苦茶な論理を吐き散らし、弁護団は犯人たち全員が幼少の頃に育った環境のせいで心神喪失となったため。

特に主犯格とされる女の子には刑事責任はないという、子供だった聡でも無理のある弁護を展開していた。

聡には犯人たちの言う「革命」だとか「共産主義」という小難しい言葉はよくわからなかった。

それでも犯人たちが本当に国家や国民のために行動を起こしたのではないのは分かった。

国家が国民を弾圧することに義憤を感じ、その国家を打倒し国民を救いだし平和な社会を実現したいというのなら、政府の要人を殺せばいいだけの話で、何の罪もない国民や、公に尽くす軍人を殺していい理由になるわけがない。裁判所もそれは分かりきっているだろう。

数年に及んだ裁判は、そんな聡たち遺族の考えを打ち砕いた。

裁判所は実行犯のうち三名は懲役一五年、残りの四名は懲役一〇年の執行猶予三年を言い渡した。主犯格と目された女子に関しては保護観察処分という有様で、誰一人として極刑になった者はいなかった。

奴らに刑事責任能力が無いという弁護側の主張が、認められた結果だった。

奴らは多くの罪のない人々を、あまつさえ自分たちを守るためにその身を捧げていた軍人や警官を、無慈悲に殺傷しながら、これからも刑務所の中でのうのうと生き続けていくのだ。

そしておそらく奴らの中には何年かすれば模範囚として出所し、自由を謳歌する屑のような奴もいるはずだった。

そして、傍聴席のあちこちで泣き声や犯人たちに向けられた罵声

がこだまする中、聡はそれをはっきりと見た。
赤衛隊の犯人たちと弁護団が何事かを話している最中、裁判で主犯格のその女の顔が笑みの形に歪んでいたのを。
言葉は悪いが、感情的になって喚き立てていた他の遺族と比べて、あまりの事態に茫然としていた聡だったからこそ、その主犯の女の笑みを見ることができたのだろう。
その笑みの意味は聡にはわからなかった。
自分のお涙頂戴の演技が功を奏し減刑されたことに対して、安堵した笑みだったのかもしれない。
それとも自分たちが引き起こした事件の被害者やその遺族を、嘲る笑みだったのかもしれない。
しかし聡にとって、笑みの意味などは問題ではなかった。
その女が笑ったこと自体が許せなかった。自分のしたことに一切の悔恨もなく、笑ったことが許せなかったのだ。
聡は思った。あれは悪だ、人の皮をかぶった悪だ。だが、日本の司法はそんな悪の権化を守ったのだ。
――あの犯人たちを許せない。
そして冷酷無慈悲な悪党を守り、弱者を虐げた法に対して怒りを覚えた。許せず、そして許せず、やはり許せなかった。
そして聡は誓った。あんな悪党が二度と無辜の人々を傷つけることが無いよう戦うことを。
その日、一人の少年が「兵士」に生まれ変わった瞬間だった。

第一話（後書き）

今後ともよろしくお願いします。

第二話（前書き）

遅筆で申し訳ありません。とにかく続きです。

第二話

二〇一七年　七月上旬　二二〇〇時（午後一〇時）　場所不明

機械油の充満する密閉式の搭乗席の上で、その男は噴き出すように流れる汗をぬぐおうともせず、正面モニターとにらめっこをしていた。

そのせいで男の顔はモニターやディスプレイに照らされ、何とも不気味な様相を呈している。

男は在日米軍の歩行戦車部隊に属する先任曹長だ。

曹長が搭乗する歩行戦車は、往来の戦車にそのまま脚をくっつけた形式で、最先端技術の粋を集めて作られた人型と較べると、何とも不格好な兵器だった。

しかし曹長はこの武骨者を気に入っていた。

ＷＴ―１８。この歩行戦車の名称だった。

車体と砲塔を合わせて全長九メートルの巨体に、計六脚の脚が三対に伸びている形状だった。

固定武装は一〇〇ミリの口径を持つＡＹ－１３レールガンが一門とＴＯＷ対戦車ミサイルが計八発、そして三〇ミリ機関銃が一門だった。

曹長を隊長として計４輌のＷＴ―１８が山間部でアンブッシュ（待ち伏せ）をしていた。

車体にはデジタル迷彩の塗装を施し、草木や小枝を張りつけた赤外線を通さないカバーを羽織っている。

完璧な偽装だった。ここまで完璧に偽装を施せばＦＬＩＲはおろかＩＲＳＴを装備した航空機でさえ、自分たちを発見することは難しいだろう。

後はいずれここを通るであろう敵を自慢のレールガンの一斉掃射で消し飛ばしてやればいい。

敵が装備する人型戦車のスタイリッシュなフォルムがレールガン

で粉砕されていく様を想像すると、曹長は思わず舌なめずりをした。
陸戦の主役が人型だと？　ふざけるな。陸戦兵器に必要なのは強靭な装甲と全てを蹂躙する重火力だ。
それに対して人型ときたらペラペラの紙装甲に、必要最低限の火力しか有していない。
二脚歩行による機動性と、様々な任務に応じて柔軟に兵装を変更できる点では人型が優れていることは認める。
だがあくまで、「優秀」な兵器であっても「万能」というわけではない。それをペンタゴン（アメリカ合衆国国防総省）のお偉いさんに思い知らせてやる。
そう思うと曹長は、トリガースイッチのついた操縦桿を手持ちぶたさに握りしめた。
その時、闇の向こうに人型の特徴的なシルエットを索敵カメラが捉えた。
来た！　曹長は、はやる気持ちを抑えながら一〇〇ミリレールガンの照準を敵に合わせる。それに倣うように、他の三輌も照準を合わせる。
敵の数はこちらと同じ四輌だったのだが、仲間とはぐれたのだろう。目の前に現れたのはたった一輌だった。
悪く思うなよ。これが「戦争」だ。そう思いながら曹長はトリガーに指を掛けた。
一〇〇ミリの口径を持つ砲身に内蔵される、電位差のある二本の電気伝導体から成るレールに挟まれた電流を通す弾体が、レールとの磁場の相互作用により加速する。
砲身から飛び出した弾体はその刹那、音速の七倍を超え、大気を切り裂く――前に敵の人型は照準線から消えていた。
馬鹿な！　どこに消えた！？　曹長はナイトビジョンによって濃緑色に染まった外界の風景が広がるモニターを食い入るように睨んだ。
――次の瞬間。部下のＷＴ－１８が突如、爆発、炎上、擱座した。

まさかばれていたのか？　ここに陣取り敵を待ち伏せていたことや発射のタイミングも相手に筒抜けだったと言うのか？
無線を封鎖しナイトビジョンはもちろんＦＬＩＲやＩＲＳＴのような赤外線カメラにも探知できないよう完璧な偽装を施していたのに？
　曹長が唖然としていると他の部下も交戦状態に突入したらしく、レールガンの咆哮と大気を切り裂く閃光が闇夜を照らす。
「機動力では向こうが上だ。十分距離をとって重火器で応戦しろ。白兵戦に巻き込まれるようなドジは踏むなよ」
「イエス、サー！」
　曹長は敵の兵装などの情報が映し出されたディスプレイを見ながら部下に指示を送る。
　ちなみにこのディスプレイに表示された情報は曹長の部下にも映し出されている。部隊内で得た情報を部隊内で共有しているからだ。
　――敵はタイプ１１の人型戦車。兵装は二五ミリ口径のアサルトライフルと近接戦闘ブレード。それに両肩にはＣＫＥＭ（小型運動エネルギーミサイル）のランチャーが装備されていた。
　レールガンは無反動で超音速の弾体を投射する代償に、ハンパではない電気を使用する。
大型のバッテリーと発電機が必要だった。そのため米軍のＷＴ―１８のような大型車両でなければ運用できない。
　それに較べＣＫＥＭのような小型の高性能ミサイルは、大がかりな発電機構を搭載しなくとも装備できるので、積載量が小さい戦闘車両は少ない火力を補うためによく装備した。
　しかしミサイルとランチャー（発射器）の単価は他の兵器と較べてべらぼうに高かった。レールガンにせよＣＫＥＭにせよ一長一短といったところだった。
「クソ！　何なんだよ！？　何で当たらないんだよ！？」
「――ッ。こちらビンゴ３！　脚部に被弾！」
「砲身充電……早くしろ！　早――」
　インカムのレシーバーから響く部下の悲鳴に曹長は檄を飛ばす。

「うろたえるな！　火力ではこちらが上だ。引き続き距離を取って応射を続けろ。ＣＫＥＭに対してはチャフを使え！」
彼らの乗るＷＴ－１８にはＥＣＭ（電子対抗手段装置）が搭載されていたが、相手のタイプ１１のＣＫＥＭにはそれは通用しない。
もしＥＣＭで対電子機器電磁波を拡散すると、タイプ１１のミサイルは電磁波の発生源に向かって誘導される仕組みなっているのだ。
とにかく形勢を立て直さねば。とりあえず後方五キロのポイントに――そこで曹長の思考は停止した。目の前に敵のタイプ１１がいたからだ。
だがタイプ１１は――相手が言う所の一一式人型戦車は曹長のＷＴ－１８にＣＫＥＭをぶち込むどころか、アサルトライフルを向けようともしなかった。
そんな敵の態度が曹長のプライドを傷つけた。
「舐めるなぁ！！」
曹長は咆えるとレールガンを散弾モードに切り替えてタイプ１１にトリガーを引いた。
しかし目の前のタイプ１１はトリガーを引く前に射線上から身を翻し、極音速で飛来する散弾を難なくフットサルの選手のような機敏な動きでかわし、一気に曹長の懐に飛び込んでくる。
まずい！　曹長はとっさにフットペダルを踏みつけながら操縦桿とギアを巧みに操る。そしてタイプ１１との距離をとって三〇ミリ機関銃とＴＯＷ対戦車ミサイルを撃ち込んだ。
が、当たらない。
敵は曹長がトリガーを引く前にやはり射線から消え、撃ちっ放し機能を搭載したＴＯＷはアサルトライフルでシューティングゲームのように撃墜していった。
戦車の性能だけではない。戦車兵のスペックそのものが上だ！
そう思うと曹長は部下に撤退し態勢を整えるようインカムのマイクに吹き込もうとして――愕然とした。
自分と味方と敵の位置を把握するディスプレイには、味方を示す

緑色の輝点が消え、代わりに敵を示す赤い輝点が曹長の周りを取り囲んでいたからだ。
――こうなったら、目の前のこいつだけでも！　そう思うと曹長はレールガンをぶっ放しながら、アクセル全開でタイプ１１に突っ込む。
「轢き殺してやるぞ！　ブリキ人形！！」
だがタイプ１１は、曹長の突貫を跳躍でかわす。
そして曹長の乗るＷＴ－１８の砲塔に飛び乗りざまに電磁ナイフを搭乗席のあたりに突き立てた。
その瞬間、曹長の目の前は真っ暗になった。
――しばらくすると、再び搭乗席の照明が点灯した。先ほどまで鬱蒼とした森林を映し出していた目の前の正面モニターは、倉庫のような建物の中を映していた。
曹長は搭乗席から降りると、格納庫の床に思いっきりヘルメットを叩きつけようとしたが、これにはＨＭＤ（頭部装着ディスプレイ）を始め、様々な精密機器を搭載していることを思い出し、止めておいた。
ふと隣を見ると、部下が情けない顔をこちらに向けていた。
「隊長。その……すいませんでした」
「……これが実戦なら謝るだけではすまんぞ」
曹長は部下の肩に手をかけながらそう言った。
今まで曹長たちは戦闘を行っているかのように見えたが、実際にはＶＲ（仮想現実）技術を用いたＶＲ訓練だったのだ。
ほどなくして向こうから敵が――国防陸軍の兵士たちがこちらにやってきた。
「今日は有難うございました」
一人の小柄な国防陸軍の兵士はそう言うと、曹長に握手を求めてきたので曹長はそれに応じた。
そして曹長はその兵士に訪ねた。
「最初の攻撃のとき、なぜ我々の位置がわかったんだ？」

「音ですよ」
「音？」
「はい。うちの一一式には高性能集音センサーが搭載されていて……人の可聴域外の音を捉えて敵の位置を把握できるんです」
「そうだったのか……そうすると我々がレールガンで掃射しようとしたことも……」
「はい。データさえ揃えていれば、集音センサーで捉えた音からその車両の種類や、その車両がどのような行動をとるのか把握できます」
なるほど。いくら偽装したとしても音までは掻き消すことはできないからな。曹長は納得した。
しかしそれだけではない。今回戦った人型のハードとソフトの技術は確かに凄い。だがそれも優秀な戦車兵が操るからこそ最大限にその性能を発揮できるのだ。
悔しいが自分たちより彼らのほうが戦車兵として優秀であることは、今回の「戦闘」で曹長は嫌というほど思い知らされた。
「もう一つ、演習の最後に私を倒したのは誰なんだ？」
自分を「戦死」に追い込んだ相手は見事なものだったなと思った曹長は、目の前の国防陸軍の戦車兵たちに誰ともなくそう尋ねた。
「私です」
先ほどの小柄な国防陸軍の戦車兵が名乗り出た。
「お前が？」
「はい」
その小柄な戦車兵が答えると、曹長は彼をまじまじと見ながらまた質問した。
「どうやったらあんな動きができるんだ？　それこそ生き物みたいな動き方だった」
「それは……」
「たのむ。教えてくれ。今後の訓練や戦闘の時に役立てたいんだ」
その少年のような――否、少女のようなといっても通じる風貌を

した兵士は、曹長のその質問に少し考え込んでいたようだったが、やがて口を開いた。
「それは、とにかく練習したからです」
「……」
曹長以下、在日米軍の戦車兵たちはその言葉に狐につままれたような顔をした。
「では我々はこれで。今日はありがとうございました」
しばし呆けていた曹長だったが、そう言って小柄な戦車兵が立ち去ろうとするのを慌てて引き止めた。
最後に、最後に聞きたいことがあったからだ。
「君の、君の名前を教えてくれないか？　軍曹？」
それに小柄な戦車兵はその童顔を引き締め、曹長に敬礼しながら答えた。
「日本国国防陸軍富士教導旅団戦車教導大隊第一中隊隷属の神埼聡軍曹です」

第二話（後書き）

ありがとうございます。これからもがんばります。

第三話

もし悪夢を食らうという獏なる生き物がいるとするなら、その夢は大いに食い応えがあったに違いない。

目の前を歩く父に追い縋ろうと必死に駆け寄る少年。だがその歩調とは大きくかけ離れたスピードで父は少年を引き離していく。

待って、待ってください。もしあなたがどこかに行ってしまったら、残されたあなたの妻と幼い息子と娘はどう生きていけばいいのですか。

あなたの帰りを楽しみに待っていた家族を、あなたは見捨てるというのですか。

――そんな少年の思いが通じたのだろう。

父はやっと歩みを止めてくれた。少年は父の背中に縋った。が、何かおかしい。

原因すぐ分かった背中は冷たく硬かった。ハッと見上げると夏服の第一種礼装の軍服は白い死装束に変わっていた。

呆然とする少年に父は振り向いた。その顔はひどく歪み、金属のプレートで所々が縫い合わされていた。

さらにその顔がぐちゃぐちゃに歪むと女の顔のそれに変わった父を殺したあの女の顔だった。そしてそれは満面の笑みを浮かべながら、いきなり少年に飛びかかってきた。

――薄暗く蒸し暑い場所で、聡は目を覚ました。

聡は国防陸軍の軍曹を示す階級章が付いた迷彩色の戦闘服を着こみ、大汗をかきながら、何かしらの搭乗席に着座していた。

聡は仕事の途中に寝てしまっていたことに気づき、慌てて手元のタッチキーを操作し始めた。

一一式人型戦車の頭脳部分に搭載されている学習型ＯＳが昨日の演習で学習した内容から、覚えさせるべきものだけを取捨選択する

ためだった。
聡はふと、自分の目から涙がこぼれていたのに気づいた。
ずいぶん昔の夢を見ていたせいだな。そう思いながら聡はその涙を拭うと、再びキーを叩き始めた。
ファイヤーコントロールシステム（火器管制機構）、射撃姿勢自動制御、戦闘状況認識倫理演算システムの状況を表示するディスプレイの明かりが薄暗い搭乗席を照らす。
やがて「学習を終了する」と、頭にかぶったヘッドセットのマイクに吹き込むと、「了解。お疲れ様でした。神崎軍曹。所要時間は三時間でした」と一一式に搭載されたコンピューターが骨伝導の機械音声で伝えて来た。
聡はその狭い搭乗席から這い出すように外へ出た。外に出ると、そこは一一式を始めとする何台もの軍用車両が駐車している格納庫だった。聡が格納庫の床に降りると、顔なじみの整備士が「寝てたんスか？」と、いたずらっぽい笑みをこちらに向けていた。
聡は「うるせえよ」と言いながら、その整備士の頭を軽く小突いた。
真夏であったのも関わらず、涼しく感じられたのはサウナ状態の一一式の搭乗席で、昼寝をしていたからに違いなかった。聡は、うん。といった感で背伸びをし、それから真夏の気温に晒され、すっかり温かくなったスポーツ飲料を一気飲みした。
神崎は格納庫にある日陰に腰を下ろすと、先ほどの夢の内容を思い出していた。本当にあれから十年以上も経ったのかと感慨深いものもあった。
あの、不当な裁判が終わった直後から聡は知力と体力を磨くことに精進し、中学を卒業後、国防陸軍少年戦車兵学校に入隊した。
少年戦車兵学校は戦車だけでなく、日本の国防軍が装備するあらゆる軍用車両を整備、運用するためのスキルを身に付けた下士官を三年という短期間で養成する、国防陸軍教導旅団戦車教導連隊隷下の教育機関だった。

初め、聡は自分の父と同じ国防海軍に入隊しようと思ったが、県内にあった国防軍地方連絡本部の職員、俗に言う「地連のおやじ」は海も空も定員を軽くオーバーしているので、入るのは難しいと言った。そこで、聡に少年戦車兵学校へ行くのを勧めたのだ。

聡も特に軍種にこだわろうとは思わなかったので、二つ返事でそれを了承した。

倍率が三〇倍にも及ぶ戦車兵学校の入学試験を聡は苦学の末に合格し、それから三年間の間、座学と実践に励んだ。

教官が黒板に書いた複雑な車両の構造や整備の仕方を、ただひたすら板書する座学の時間は聡にとっては苦痛でしかなかった。

しかし、それも実技実習の時間になると一変した。空手の道場に通っていた頃から、自分でも薄々と感づいてはいたが、聡は頭でより体の方で覚える才覚に恵まれていたかったらしく、車両に限らず兵器の整備の仕方も運用も、要は体で覚えればいいだけの話だった。

その後、聡は少年戦車兵学校を創立以来のトップクラスの成績で卒業すると、そのまま富士教導旅団戦車教導連隊に隷属となった。

卒業の際、聡にあてがわれたのは、「鋼鉄の巨人」一三式人型戦車だった。

全高六メートル強、乾燥重量六トン、全備重量一一トンの巨人は、旧ソ連との地対地戦において圧倒的機動力と重火力で、戦闘を優位に進めるために開発された九〇式が前身だった。しかし当方の敵だったソ連が崩壊し、この巨人の存在意義が危ぶまれた。

しかし、その後の研究の積み重ねで「市街地における対ゲリコマ戦」において優秀な性能を発揮することが分かり、量産停止の憂き目を逃れることができた。

そんな何とも複雑な経緯を辿った兵器だったが、それでもコイツが優秀な兵器であることは、幾度となく共に演習に参加した者なら容易に分かったことだろう。もちろん聡もその中の一人だった。

先ほどまで整備班長の怒鳴り声などで騒がしかった格納庫が急に静かになった。

聡は何気なく格納庫の出入り口を見て、慌てて飛び上がるように立ち上がり敬礼した。
国防陸軍少将の肩章をつけた軍人が入ってきたのだ。
その少将はしばらく格納庫の中を見渡していたが、やがて聡の方へ近づいてきた。
「神埼軍曹だな？」
「はい」
少将が尋ねて来たので聡は答えた。
「私は佐竹幹弘少将だ。いや、昨日の演習は見事なものだった。――正面火力で勝る相手を機動力で圧倒する。正に人型の長所を最大限に引き出したからこそと言えるだろう」
「……大変恐縮ですが、それほど褒められるようなことはしていません。演習で勝てたのは部下や整備班の人たちおかげですし。それに私自身が撃破したのは一機だけで――」
「下手な謙遜はいい。褒めてやっているのだから素直に喜びたまえ」
佐竹は聡の言葉を遮った。心なしか不機嫌になっているようだ。
「申し訳ありません。言葉が過ぎました。身に余るお褒めの言葉、大変恐縮です」
佐竹から滲み出た不穏なオーラを敏感に感じ取った聡は、とりあえず謝罪ついでに礼を言う。
そんな聡にまだ不服そうな佐竹だったが、とりあえずは話を続けた。
「早速、本題に入りたいところだが、ここでは何だから司令部に行くぞ」
「はい」と聡は返すと、踵を返して司令部に赴く佐竹の後を聡は追った。
クーラーのきいた応接室に入ると、佐竹は部屋のテーブルの椅子に腰かけるよう促してきたので、聡はそれに従った。
佐竹もどっかりと椅子に座ると早速、聡に聞く。

「単刀直入に聞く。『海兵旅団』に来ないか？」
佐竹の唐突なその問いに聡が戸惑った。海兵旅団という名を持った部隊は国防軍にはないし、第一、聞いたことも無かった。
海兵旅団とは何ぞやと聡が聞き返すと、佐竹は「日本における国防の要と成りうる存在」と答えた。
現在の国防陸軍の編成は、旧陸自の旧ソ連との地上における大規模な戦闘を想定した編成のままだった。
まず旧ソ連といった仮想敵国が、大規模な陸上戦力でもって日本本土に侵略を開始。
その際、国防陸軍は国防海軍と国防空軍の支援を受けつつ、強大な火力でもって敵を釘つけにする。
その後、在日米軍を始めとする同盟国軍が加勢に加わり、敵を撃退する――これが長年、国防陸軍が旧陸自時代から抱いてきた国防のセオリーだった。
しかし最大の仮想敵国である旧ソ連が崩壊して早三〇年以上もの月日が経ち、日本を取り巻く情勢も一変した昨今において、今の国防陸軍の重装重火力編成では突発的なテロや災害を始めとする突発事象に対応することは難しい。
第二次朝鮮戦争後、憲法改正と再軍備に日本が舵を切った事を区切りに、国防省も国防陸軍の抱えるこの問題を解決すべく「機動師団構想」を打ち上げたのだが、それでもまだ不十分だと佐竹は聡に熱く語る。
佐竹を旅団司令に置き、国防三軍の指揮系統から独立した総理大臣、もしくは国防大臣の直轄部隊として独自の権限と、独自の海上及び航空移動手段で迅速に日本の東西南北にどこにでも展開する精鋭戦闘集団。これが海兵旅団の全容だった。
「……そんな、精鋭部隊に俺が、いえ、自分が？」
あまりのスケールの大きさに、聡は改めて戸惑いを覚えた。
「それほどの精鋭部隊なら、俺の他にも優秀な戦車兵はいくらでもいますし……それに俺は去年、少戦校（少年戦車兵学校）を卒業し

たばかりのひよっ子で――」
「先ほども言ったと思うが、下手な謙遜は相手の機嫌を損ねるだけだぞ」
また聡は佐竹に言葉を遮られてしまった。
「私は実力至上主義でな。その私が君の実力を見込んで誘っているのだ。素直に喜んだらどうだ」
そう言うと佐竹はＰＤＡを取りだすと手慣れた感じで操作し始めた。
「神埼聡、二〇一三年度に国防陸軍少年戦車兵学校に入学。在学中の座学における成績は中の上。しかし実技演習においては在学期間の三年間、トップクラスの成績を収め卒業。さらに卒業してすぐにレンジャー訓練生として国防陸軍松本駐屯地第一三歩兵連隊に出向――三カ月後に見事レンジャー資格を……やはりすごいな」
ＰＤＡに表示された聡の経歴を眺めながら佐竹は独りごちるように言った。
「ありがとうございます」
聡は今度こそ素直に礼を言った。
「神埼軍曹、最後にもう一度聞く。うちにこないか？」
聡はしばらく考えたが、すぐに答えは導かれた。
自分の願望、母にも妹の優にも教えなかった願望を成就させる手段としては、海兵旅団に入ることは悪くはない、むしろ最高の選択だと聡は思った。
聡の願望。それは世にはびこる不当な暴力に対して、自らが抑止力となり、必要とあらば暴力で持って制裁を敢行することだった。
聡は佐竹に手を差し出した。
「なんだ？　残念だが私は易者ではないぞ？」
聡は首を少し振ると言った。
「これから、お世話になります」
佐竹はふっと笑うと、差しのべられた聡の手を力強く握った。
「残念だが、君を『お世話』するほど『うち』はぬるくはないぞ？」

微笑みながら言う佐竹に聡もまた、力強く返す。
「望むところです」

第四話

二〇一七年　七月上旬　埼玉県朝霞市

明朝の時間、そのマンションのそばを走る道路の脇に、一台のワゴン車が停まっていた。

車の中には数人の男が乗り込んでいた。その中の一人はマンションの一室をビデオ撮影していた。男の名前は２２８という。

もちろん男にはきちんとした姓と名があったし、家族や友人は男を名前で呼んだ。だが「職場」では誰もが男を２２８と呼んだ。

この男だけではない。現に今、男と同じワゴン車に乗り込んでいる別の男たちもまた番号で呼ばれていたし、呼び合っていた。

「職場における人権」とやら叫ばれるこのご時世に、本当の名前ではなく番号で呼び合わされていることが世間様に知られれば、一般企業なら間違いなく、労働基準監督署かマスコミの餌食となるのだろうが、この男たちの職場――国防情報庁は、そうはならなかった。

どだい、非公式の存在である防情庁（国防情報庁の略）が、世間の目にさらされるということは、まずあり得なかっただろう。

また、防情庁に努めている職員のほとんどが、番号で呼ばれることに何の不満も疑問も持っていなかった。

確かに新米の頃は、一般社会とは明らかに乖離したこの風習に戸惑い、疑問を感じる。だが、人間というのは、どんな環境にもある程度なら適応するように作られている。

しばらくすると役職や階級のそれのように、平気で番号で呼び合うようになってしまうのだ。

それよりも、「国益を守る」という目的で与えられる「任務」に伴う理不尽や不合理、やるせなさ、苦痛の方が、防情庁に努める職員たちの不満だった。

今、従事している「任務」はその理不尽や、不合理の典型だな。と、男は――２２８は思った。

２２８たちに与えられた任務というのは「日本の防衛に関わる重要な任務」だった。
警察の人手不足から警察庁の要請で、巷のチンピラやヤクザの違法薬剤輸入の阻止という、明らかに本業ではない任務に就いていた２２８たちは、諸手を挙げて喜んだものだった。
別に警察に要請されたからといって、防情庁が人手をよこす義理は微塵も無いのだが、「打倒市ヶ谷」を掲げるサッチョウ（警察庁）、高級官僚のご機嫌を損ねると厄介だということで、泣く泣く、決して多くない人員を警察に出向させたのだ。
警察との合同捜査で、市ヶ谷（主に国防省や国防軍、防情庁のように防衛に携わる機関を、総じてこう呼ぶことがある）にたっぷり偏見を持つ女性管理官のパワハラまがいの仕打ちを受け。
それに同情するふりをしながら、心のうちではいい気味だと嗤っている態度が見え透いた自分より一回り年下の警察官を見ていると、自分たちの雇用者と警察上層部との馴れ合いの中で生じた不利益を、自分たちが被っているとしか２２８は思えなかった。
そんな警察からの嘲笑と侮蔑を一身に受け止めてきた２２８たちにとって、「防衛に関わる重要な任務」に従事出来ることが、どれほど嬉しいことだったかは言うまでもない。
だが、そんな２２８たちに与えられた任務というのは「あるマンションの住人を四六時中、三六五日監視しろ」というものだった。
監視対象１００３。名前は四方光輝。出生日は西暦一九八七年三月八日。出生地は新潟県魚沼市。県内の高校を卒業後、早稲田大学の情報系の学部に進学するも三回生時に中退。
その後、自身で資金を集め、コンピューターセキュリティ企業を二三歳で創業。以降、大手企業がＩＴセキュリティやコンピューターセキュリティの導入する際、アドバイスや実際にセキュリティソフトを開発することを生業としていた。
また防衛産業のセキュリティにも大きく関わっていることも分かった。

２２８は近くの税務署から「かなり非合法な形で」四方の年収を手に入れると、一日中パソコンをいじるだけでこんなに儲かるものなのかと驚いたものだった。
何故、この男を監視することになったのかというと、一か月以上もの間、行方知れずになったからだそうだった。
幸い、四方はマンションの自室にひょっこり戻ってきて、いつもの通りパソコンをいじりまわしていた。
しかし、防情庁としては第三国からのサイバー攻撃への対処が、国際レベルで急務となっている中で、日本のコンピューターセキュリティに大きく関わる人物の行方が簡単に分からなくなるのは具合が悪い。
そんな訳で２２８を始めとする十数名の防情庁職員らに、監視班を編成し、二四時間体制で四方を監視するよう命じたというわけだ。
――これが昨年の八月のことである。それからというもの、２２８たちは今に至るまで、約九か月もの間、彼を監視し続けていたのだ。
２２８は、否、２２８たちは心底うんざりしていた。
なにせ、四六時中、むさ苦しい男を監視し続けるという仕事がどれほど精神衛生上良いわけがない。幸い、２２８たちの他にも監視班が編成されているので、ある程度のローテーションを組むことができた。
それでも人手不足のため、土日、祝日、祭日を返上しなければならなかったのは言うまでもない。
それに２２８たちは、実際のところ監視対象が――四方が何をしているのかほとんど把握できていなかった。
大手企業のセキュリティや情報システムの構築に関する、アドバイスやソフトの開発などをやっているのは、分かってはいるが、四方は顧客である企業との間の通信を全て、公開鍵暗号、それも解読が事実上不可能とされるＲＳＡ暗号を用いたＶＰＮで行っていた。
しかも顧客の情報の管理や、発注に対するワクチンソフトの開発

や情報システムの設計は全て、スタンドアローン化したパソコンで管理していたので、何をどのように作っているのか分かるはずがなかった。
唯一、分かったのは、娯楽用のパソコンでネットに違法アップロードされた、アニメを見ていることぐらいだった。
早い話、その日、彼が何時に起きたのか、何を食べたのか、何をしているのか逐一記録し、それを報告する。何とも実りの無い「作戦が」彼ら２２８たち監視班に与えられた任務だった。
――だが、そんな作戦も今日限りだ。上が四方を監視対象から外すことを２２８たちに通達してきたのだ。
２２８たちは素直に喜んだ。これでこのくだらない作戦から解放される。そう思うと現金なものだが士気は俄然、奮い立ってくるのだった。
２２８はタバコをくわえ、火をつけようとすると、隣でパソコンをいじっている部下があらか様に嫌そうな顔をした。
まったく最近の若い奴はどうしてタバコをそんなにも嫌うのだろうか。内心毒づきながら、２２８はタバコを箱に戻した。
そうこうしていると、四方がマンションから出てきた。２２８は時計を見た。午前九時四五分二一秒。いつも通りの散歩の時間だ。
２２８はワゴンから降りると、三人の同僚もそれに続いた。
ワゴンの中には二人が残った。一人は何かあった時、素早く外の仲間を迎えに行く運転手。
もう一人は外の仲間のメガネや胸ポケットに刺さったボールペンなどに搭載された、小型のＣＣＤカメラから送られてきた情報を分析するスペシャリストだった。
四方は、いつも通りコンビニでパソコン関連の雑誌と弁当を購入すると、そのまま近くの公園へ向かった。そこで一服するつもりなのだろう。これもいつも通りだった。
四方は公園に設置されるベンチでタバコを吸い始めた。

タバコを吸い終わると、ベンチの上でそれをもみ消した。いつもは二本だけなのに今日は四本も吸ったのだな。２２８はそんなことを思った。
四方がベンチから立ち上がり歩き出すと、２２８たちはそれを追った。
途中、四方は立ち止るとゴミ箱に向かって、空のタバコの箱を投げた。
そのゴミ箱まではほんの数メートルだったが、それは見事に外れた。四方はそれを拾おうとせず、自室のあるマンションに向かって歩き始めた。
そして、２２８たちが四方のマンションの脇に停めてあるあのワゴンに乗ると、本部から連絡がきた。
「緊急の案件だ。詳細は本部で話す」
感情の起伏の少ない、機械的なその声は防情庁の内事部長の声だった。
「……了解」
２２８がそう言うと、内事部長は電話を切った。
それを確認すると、２２８は社債電話の受話器を思いっきりワゴン車の床に叩きつけた。ロクでもない任務を押しつけておきながら、労いの言葉も言えないのか？　クソ！
自分より一回り年下の内事部長の顔を思い出しながら、２２８が胸の内で毒づいていると、「国民の税金ですよ？」と部下が睨みつけながら受話器を電話に戻していた。
そんな光景を眺めながら、２２８は内事部長の言っていた「緊急の案件」がどのようなものなのか気になっていた。
とにかく何でも良い。やり応えのある仕事をさせてほしい。
そんなことを思いながら、２２８は防情庁の本部がある国防省へ向かうよう、ワゴン車の運転席に乗っている部下に命令を下した。
２２８たちの乗ったワゴン車は、四方の住むマンションを後にした。

先ほどの公園

その男はベンチに座り新聞を広げ、ごく自然にベンチの端に視線を向けると、四本の吸い殻があるのを認めた。

男はしばらく新聞を読んでいたが、やがてベンチから立ち上ると、歩き始めた。

しばらく歩いた先にあるゴミ箱の前に行くと、男は新聞を丁寧に折りたたむと、そのゴミ箱の中に突っ込んだ。

――その際、すぐそばに落ちていたタバコの箱を拾うとそれもゴミ箱に入れた。……この時、男がタバコの箱の中に入っていた「中身」を抜いたことを誰かが見ているはずもなかった。

男は、そのまま近くの駅にあるトイレに行くと、その「中身」を改め、そこにビニールのフィルムに包まれたＵＳＢを認めると、ほくそ笑んだのだった。

第五話

二〇一七年　七月下旬　一三〇〇時　沖縄県　那覇市

その場に、スクランブル（緊急出撃指令）を知らせる、神経を逆なでするようなアラートが響く。

国防空軍第二〇四戦闘飛行隊に隷属する新人の小坂武彦少尉は、待機室から飛びだすと格納庫へ向かった。

すでに格納庫では整備兵たちが小坂の愛機――Ｆ―１５Ｊ改の発進準備を整えている。

小坂はラッタルと呼ばれる階段を駆け上がり、Ｆ―１５Ｊ改のコックピットに飛び込むように着座した。

小坂はＨＭＤ（頭部装着ディスプレイ）が搭載されたフライトヘルメットをかぶり、酸素マスクを装着する。

すぐ隣でも僚機パイロットの大見恵子少佐も同じような動作をしていた。

大見は第二〇四戦闘飛行隊の隊長でありながら、第二〇四戦闘飛行隊が隷属する第八三戦闘航空団ではお調子者のムードメーカーだった。

だが大見は国防空軍だけでなく世界トップクラスの技量を持つ、天才ファイターパイロットとしても有名だった。

小坂はディレクター（誘導士）の指示に従いＦ―１５Ｊ改を滑走路に出す。

旧自衛隊時代からこの滑走路は民間との共同使用をしているため、スクランブルの際は民間機を安全に誘導しなければならないのだが、その誘導は上手くいったらしい。

――針路クリア。

二発のＦ１００―ＩＨＩ―１００エンジンが咆哮を上げる。

全長一九・四三メートル、全高五・六三メートル、全幅一三・〇五メートルの大鷲が爆音とともに飛び立ち、アフターバーナーの炎

で大気を焦がしながら空の彼方へ消えていった。

一三一五時　尖閣諸島沖

〈アンノウン（国籍不明機）は中国空軍籍のＪ―１１と判明。機数は四。現在も北東を高度六〇〇〇で北上中。なおも日本の領空に近づきつつある〉

――フランカーか。小坂はＨＭＤに表示された情報を見ながら、その大柄な機影を思い浮かべた。

Ｓｕ―２７。全長二一・九四メートル、全高五・九三メートル、全幅一四・七〇メートル。二発のＡＬ―３１Ｆエンジンは最大速度二・三を叩き出す。

旧ソ連で設計・製造された大型の制空戦闘機で、現在でもロシアを中心とする第三世界で使用され、極めて強力な格闘性能、長大な航続距離を有している。

中国はこのＳｕ―２７をＪ―１１として自国で生産を行っていた。しかし近年では生産をする際にあたって、ロシアにライセンス料を支払っていないことが問題となっている。

ロシアは明らかな兵器著作権の侵害だと怒り狂っているが、当の中国はＪ―１１は自国の技術で独自に作り上げた国産戦闘機であると主張した。

中国という国はどうも「俺のモノは俺のモノ。みんなのモノも俺のモノ」という極めて単純なジャイアニズム原理で動いているようだった。

以前、小坂たち第二〇四戦闘飛行隊の面々がそんなことを話し合っていると、大見は言ったものだった。

「とにかく自分の言うこと成すことが正義だと思ってるんだよ。何せ、世界『中』で最も『華』々しい『人民』の『共和国』だからね」

大見がそう大袈裟に肩をすくめて言うと、周りにいる者は皆、失笑したものだった。大見のこういう所がムードメーカーである所以なのかもしれない。

まあ、それはさておき、中国にも都合というものがあるのかもしれないが――
そんなこと知った事か。お前らの好きにはさせん。小坂はそう思うと操縦桿を握りしめた。
そして小坂は管制塔にコールした。
「ジャンパー2より管制塔へ警告射撃の許可を求む」
「不可なり」
「中国空軍機はなおも我が国の領空へ接近しつつある。繰り返す警告射撃の実施を求む」
「繰り返す射撃は不可なり。引き続き警告を続けよ」
クソッたれ！　小坂はレシーバー越しの管制員を内心罵った。
飛ばすだけ飛ばしておきながら撃つことは許さない。これでは自衛隊が国防軍に昇格した意味などないではないか。
そんな小坂の心情をあざ笑うかのように、四機の中国空軍のＪ―１１は悠々と日本の領空へ近づいていく。
こちらの警告が聞こえていないわけがない。もちろん聞こえているとしても「自国の領域を飛んでいるだけで非難されるようなことは何もしていない」というお決まりの返答が返ってくるだけだろうが。
それにしてもこの態度は何だ。こちらが撃ってこないものと余裕をかましているのか、それとも鼻から相手にしていないのか。
小坂はキャノピー越しのＪ―１１を睨みつける。
赤い細帯の中央に縦書きの金文字で「八一」と書かれた赤い星が描かれた大柄の銀翼が、挑発的に陽光を反射する……。
「舐めるなあ！」
我慢の限界を超えた小坂はそう咆えると、一機のＪ―１１に機首をむけ、スロットル全開で突っ込んでいく。
小坂は決して好戦的な男ではなかったが、身勝手な言い分と不当な暴力で他国の領土を、自尊心を踏み躙る輩が許せなかっただけだった。

小坂の乗るＦ―１５Ｊ改の両翼にはＭ６１Ａ１二〇ミリバルカン砲と四発のＡＡＭ―５（〇四式空対空ミサイル）が搭載されていた。
しかし小坂はそれらを相手のＪ―１１に叩き込むつもりは毛頭なかった。
だが、ギリギリの行動で自国の領土を寸分足りとも渡さないという不退転の意思を見せつけようとしたのだ。
小坂はＪ―１１にドックファイトを仕掛けた。
いきなりの小坂の機動に動転したのであろう、Ｊ―１１は慌てて距離を取ろうとする。
しかしそれを逃がす小坂では無かった。巧みに翼を操り獲物を仕留めにかかる様は、まるで猛禽のようだ。
小坂は一気に勝負を仕掛ける。
小坂は自機とＪ―１１が並行飛行しているポジションから、一気に高度を上げる代わりに速度を落とし、相手の後ろを獲る。ハイ・ヨー・ヨーと呼ばれる機動だ。
いきなりドッグファイトに追い込まれた挙句、簡単に後ろを獲られるとは、小坂のような国防空軍のファイターパイロットから見れば何ともお粗末な飛行だった。
ま、相手が悪かったんだな。小坂はＨＭＤ上でＪ―１１にエイミング・レティクル（照準マーク）が重なろうとするのを見ながらそんな風に思った。
しかし、ふと小坂は他の三機のＪ―１１が何ら反応を返してこないことに気がついた。
味方が敵に追い回されているというのに、えらく冷たいじゃないか。まさか本当に撃ってこないと舐めて掛かられているのか？
そんな小坂の悠長な考えは自機の機体に襲いかかった衝撃波にかき消された。
「！」
小坂は何が起こったのか瞬時に理解した。Ｊ―１１はインメルマンターンと呼ばれる機動で一気に一八〇度反転。小坂のＦ―１５Ｊ

改とすれ違ったのだ。
理屈そのものは簡単なことだ。が……
「ふ、ふざけるな。この速度で！？」
小坂は驚愕した。今の速度でインメルマンターンをやれば、確実に十数Ｇの重力に押しつぶされるはずだったからだ。
しかし相手はそれを見事にやってのけた。そこで小坂は疑問に思った。これほどの腕なら、もっと簡単に自分の後ろを獲れるはずだ。
なのに何故、わざわざこんな面倒な――
そして小坂は気が付いてしまった。それは簡単なことだ。自分はいいようにＪ―１１のパイロットに踊らされていたのだ。
そして他の三機もわざわざ手を貸すまでもないと踏んだのだろう。
そんなことを小坂が考えている間に、Ｊ―１１は小坂のＦ―１５Ｊ改に襲いかかる。
形勢逆転。
小坂がこの状況から逃れる方法は二つある。
一つはあのＪ―１１と同じようにインメルマンターンを仕掛け、再び後ろを獲る。
もう一つは、最大速度で一端、戦線を離脱する。
そして小坂は屈辱に唇を噛みながらも後者を選んだ。
小坂はアフターバーナーを焚き、Ｊ―１１から逃れようとする。が、Ｊ―１１は逃がそうとはさせなかった。
あのＪ―１１のパイロットは今頃、舌舐めずりしながら小坂のＦ―１５Ｊ改に照準を合わせようとしているに違いない。
小坂はそこで恐怖を覚えた。まさか撃つ気か？
小坂は例え、相手をロックオンしたとしても撃つつもりはなかった。だが相手も同じようなことを考えている保障はどこにもないのだ。
小坂が後ろのＪ―１１からゆらりと滲み出る殺気に肌を粟立たせた瞬間――再び強烈な衝撃波が襲いかかった。
まさか敵の増援か？　しかし小坂のそんな絶望は打ち砕かれる。

「小坂少尉！」
「！」
レシーバーの向こうから心強い声が聞こえてきた。
国防空軍航空戦闘軍団南西航空軍第八三戦闘航空団第二〇四戦闘飛行隊隊長の大見恵子少佐その人の声だった。

それからは見事なものだった。大見はＪ―１１とすれ違いざまに、ほぼ最大戦速でスプリットＳと呼ばれる機動で後ろを獲ると、あっけなくロックオンした。
すると大見を手強いと見たのか、Ｊ―１１は機首を翻すと防空識別圏を離脱していった。
小坂がレーダーディスプレイを見ると、他の三機のＪ―１１を表す三つの輝点もすでに消えていた。
「いやぁ、ごめんごめん。他の連中を相手してたらさ、遅くなっちゃった」と大見はこともなげに小坂に言った。
――まさか、他の三機を隊長は一人で撃退したのか？
そして小坂はキャノピー越しから、いつもより大きく見える大見のＦ―１５Ｊ改を見ながら、改めて自分の失態を恥じた。
「さて、小坂ちゃん。説明してくれるかな？」
大見は口調こそ、いつも通りのお調子者といった感だったが、明らかに怒りのオーラが滲み出ていることぐらい小坂にはわかった。
「すみません……でした」
すっかり落ち込んだ小坂の声を聞くと大見は深くため息をつき、「私に謝ってもしょうがないでしょ」と言うと、おもむろに諭すように小坂に話しかけた。
それは大見にしては極めて珍しいことだったが、その分、言葉には人一倍の重みがあった。
「小坂少尉、私たちは軍人だよ。もし日本が侵略されそうになったらその時は全力で戦わなければならない。でも本来軍人は戦争の抑止力として身を挺す存在なんだ。その軍人が戦争の火種を作るよう

なことは決して許されないんだよ」
「……しかし」
「でも小坂少尉の言いたいことも分かるよ。確かに今の国防軍は抑止力として機能しきっていないところもあるしね」
「だったら！――」
「聞いて、小坂少尉。もし戦争が起これば真っ先に戦うのは私たち軍人だよ。前線で仲間が死ぬ苦しみは嫌というほど思い知られることになるかもしれない」
そこで大見は一息つき、小坂の様子を見た。
小坂が真剣に話を聞いているのを認めると大見は話を続ける。
「もし、そうなったら私や少尉だけの責任だけじゃ済まない。周りの人たちのことも考えなくちゃダメだよ」
「……つまりコトを起こす時は慎重にならなくてはならないと？」
「そういうこと！」
大見は小坂は導きだした問いに満足したようだった。そしておもむろに機首を基地のある那覇空港に向けた。
それに倣いながら小坂は、大見の言った「抑止力」という言葉を反芻していた。
軍隊は戦争をするためのものではなく戦争を抑止するために存在する。そんな当たり前のことを忘れていた自分は軍人失格だなと小坂は思った。
そしてそのことを思い出させてくれた大見に小坂は感謝しながら、那覇空港へと翼を進めるのだった。

同刻　那覇市　国防空軍宮古島分屯基地
尖閣諸島沖で突如発生した国防空軍機と中国空軍機とのドッグファイトのおかげで、幾分寿命の縮まる思いをした曹長の襟章をつけた下士官は、ホッと胸を撫で下ろした。
昨今、中国軍に対するスクランブル事案は幾度となく発生しているが、曹長はここまで大掛かりな「空戦」を見るのは初めてだった。

そして中国空軍機が中国方面へ帰島していくのを確認すると、曹長は上にその旨の要点を報告し、またレーダーディスプレイを食い入るように見始めた。
それが曹長にとっていつも通りの日常だった。ふと、レーダーディスプレイと一体となった卓上の横に目を滑らせると眉をひそめた。
そこには「必読」と書かれたラベルの張られたＵＳＢメモリが置かれていたからだ。
そのＵＳＢメモリのことが気になった曹長は交代の時間が来ると、事務に置いてある事務員のパソコンを借りた。
曹長はパソコンのソケットにＵＳＢメモリを差し込んだ。
――えらく読み込みに時間が掛かるな。曹長がそう思っていると読み込みが終了した旨を知らせるウィンドウが開く。
そして曹長はＵＳＢメモリの中にあるファイルの一つを開こうとして――止めた。ファイル名のところに「平成一Ｘ年度予算」という表示がされていたからだ。
ずいぶん古いやつだなと思うと曹長はパソコンの電源を切ると近くの事務員にＵＳＢメモリを渡した。
そしてたぶん手違いで昔の予算表が管制室に届いたのだろうと言う旨を曹長はその事務員に伝えた。
曹長の去った後、事務員はＵＳＢを自分の机の引き出しにしまうと、再び自分の仕事に取り掛かった。もちろん予算表の古さと較べても、そのＵＳＢがごく最近のモデルであったことなど気にも留めなかった。

同刻　宮古島分屯地ＢＳＤＴ（基地特別守備隊）詰所
国防陸軍兵長であることを示す赤地に金の横線の襟章をつけた兵士――安田純一兵長は、きつい真夏の日差しに思わず汗をぬぐった。
安田は各僻地に点在するレーダーサイトを守るために創立されたＢＳＤＴの一員だった。
ＢＳＴＤは長期間の厳しい教練を突破した者しか入れないエリー

ト部隊だ。
しかし、あまりの過酷な訓練と、それを突破したとしても僻地に飛ばされるとあって志願する軍人は極めて少なかった。
だがこの安田は自ら進んでＢＳＤＴに志願した。
周りからは「考え直せ、楽な仕事じゃないぞ」と何度も説得されたが、安田の意思は固かった。
純粋に「国を守りたい」と国防軍に入隊した安田にとって、日本の防空の要であるレーダーサイトを守るという重大な使命を課せられるＢＳＤＴは極めて魅力的な場だったのだ。
この基地は例え俺一人になったとしても守りきってみせる。安田はそんな思いを胸に、今日も重い小銃を担いで、歩哨に立つのだった。
すでにこの分屯地――否、国防軍という組織そのものに「敵」が侵入していることなど知りもせずに……

第五話（後書き）

感想をよろしくお願いします！！

第六話（前書き）

ＳＫＵＬＬ１９１２さん、初感想ありがとうございます！

第六話

八月中旬　二一〇〇時　対馬沖　国防艦隊第一潜水艦隊群隷属「らいごう」

男たちの間を静寂が支配する。――一切の物音も命取りになるからだ。

ここは国防海軍国防艦隊に隷属する潜水艦「らいごう」のＣＩＣだ。

今日、「らいごう」はＰ―３Ｃの対潜水艦訓練に「標的」として参加していた。

Ｐ―３Ｃは国防海軍が保有する対潜哨戒機の一種で、世界でもトップクラスの性能を誇っている。

当時の海上自衛隊がソビエト原潜の脅威に対抗するために導入したのだが、導入時の演習の際、その広域哨戒能力を発揮したＰ―３Ｃは次々と潜水艦を探知し、撃沈判定を叩き出した。

これに当時の海上自衛隊のドンガメ（潜水艦）乗りは「Ｐ―３Ｃショック」とも呼ばれるほどの衝撃を受けた。

それ以来、Ｐ―３Ｃと潜水艦との能力向上競争は熾烈を極めるのだった。

現在ではＡＩＰ（非大気依存潜航）能力の向上により、Ｐ―３Ｃが潜水艦に対して優勢を保っていられるのは難しいと思われていた。

「らいごう」艦長加賀山修三大佐もその一人だった。

だが、春の名残の残る今年の五月上旬、「らいごう」はクローム０６というコールサインのＰ―３Ｃに血祭りの挙げられたのだった。

あの魚雷の代わりに撃沈判定を伝える中立信号の不快な音が加賀山の耳には未だに残っていた。

だが、それも今日までだ。加賀山はニヤリと笑った。今度こそ三カ月前の屈辱を晴らしてみせる。

「深度そのまま。微速前進。針路二七五」

加賀山がそう言うと、潜航ハンドルを握った先任伍長は機敏に反応する。
国防海軍総司令部から「らいごう」とクローム０６に与えられた任務の内容は〈〇三〇〇時から二二〇〇時。「らいごう」は潜航訓練を行い。クローム０６はそれを阻止せよ〉というものだった。
ようは「らいごう」はただひたすらクローム０６の「耳」と「目」から逃げ続けろということだ。
そして演習開始から一七時間。クローム０６から数十キロ離れた地点で「らいごう」はバッテリー潜航を続けていた。
以前の演習では「新型ディーゼルエンジンの能力測定」という任務が課せられ、バッテリー潜航ができずに散々な目に遭ったが、今回は違う。
ディーゼルを稼働させないバッテリー潜航に、デット・スロー（最低速）。スクリューから発生する音紋は皆無に近い。如何に優秀な哨戒機であっても、如何に凄腕のパイロットであっても、見つけることは困難だろう。
卑怯者だとか小心者と罵られてもいい。加賀山は思った。
真の意味で優秀な軍人というのは、蛮勇の突貫を繰り返す兵ではない。
与えられた力を最大限に引き出し戦果を挙げる者を指す。

同刻　対馬沖上空　Ｐ―３Ｃクローム０６
「クソ、どこにいる」
ターボプロップのエンジンの重厚な爆音が奏でる協奏曲の中、国防海軍航空軍団第一航空軍第一航空隊に所属する国谷義彦中尉はディスプレイを睨みつけながら、そう吐き捨てるように言った。
「タコ、落ち着くんだ」
ヘッドセットのレシーバーから聞こえてきたクローム０６の機長の言葉に、国谷は「すいません」とだけ答えて、再び箪笥大のコンピューターからの情報を集約したディスプレイを注視し始めた。

「タコ」とは、兵庫県明石の名物のあの軟体の海洋生物のことではなく、「タクティカル・コーディネーター」の略だ。
タコは潜水艦の音紋を聞き分けるＳＳ１とＳＳ２呼ばれる担当の二人を始め、すべての搭乗員を統括する、言わばＡＳＷ（対潜戦）の戦術責任者のことだ。
そのタコの中でも国谷はタコアルファーと呼ばれる最高ランクの資格を持っていたが、今回はそんな凄腕を発揮しきれずにいた。
「ＳＳ１よりタコへ。連中、バッテリー焚いてるんでしょうね。何も聞こえてきません」
ＳＳ１のうんざりした声がレシーバーから響く。
「タコよりＳＳ１へ。まだ四〇分残ってる。最後まで諦めるな」
弱音を吐く部下をそうたしなめる国谷だったが、「らいごう」のＡＩＰ能力。とりわけ日独米の三国で完成させた燃料電池の性能を知っていれば無理もないと内心、ため息をついた。
潜水艦の潜航には二つの種類がある。一つはディーゼルエンジンを稼働させる方法。もう一つはバッテリーを使用する方法である。
バッテリー潜航はディーゼルエンジンを使用するよりも遥かに静粛性に優れていた。
しかし何時間に一度は海上に浮上し、空気を取り込んで、ディーゼルエンジンを稼働させ、次のバッテリー潜航のために充電しなければならないという致命的な欠点があったが、「らいごう」に搭載された燃料電池はその欠点を克服していた。
さらに川崎造船が技術の粋を結集し設計したリチウムイオン電池を併用して使用すれば、世界最強クラスの静粛性を誇る。
前の演習ことを根に持ってるのだなと、国谷はＥＳＭ（電波探知）アンテナすら出さずに海中に潜む「らいごう」のことを思いながら苦笑いした。

二二三五時　「らいごう」
加賀山は腕時計を見る。演習終了まで、後二五分。

「今度こそ勝って浴びるほど飲みましょうか。艦長」
副長の問いかけに。加賀山は「ああ」とだけ返すと、全乗組員に静かに指示を下す。
「演習終了まで、後二三分。総員、最後まで気を抜くなよ」
そうヘッドセットに吹き込むと加賀山は発令所に備えつられている椅子に座りなおした。そしてふと手前の兵装操作用のコンソールのある方に目を向けた。
そこには屈強な海の男たちに較べて幾分狭い背中が目に映る。水雷士の古川早苗少尉だ。
じっと見られていることに気が付いた古川は、ちらとこちらを見るとその童顔に笑みを浮かべた。
加賀山は頭の略帽に手をやりそれに応えた。
――国防海軍士官の資格無し。加賀山はそう自分を戒めると再び前に目を向けた。

二二四〇時　クローム０６
「捕まえた！」
レシーバーから響いたＳＳ１の大声にもんどり打ちながらも国谷は後ろを振り返る。
「タコよりＳＳ１へ。状況報告は正確に」
「ＳＳ１よりタコへ。申し訳ありません。ファーストＣＺ。チャンネル３です」
ＣＺとは遠距離で発生する音紋を捉えたという意味で、チャンネルとは音紋を受信するパッシブ・ソナーのことで、末尾の番号は数多に投下されるソナーの番号を示す。
演習でも実戦でも対潜哨戒機のクルーには、潜水艦の座標は知らされていない（知るわけがない！）。
そのため何らかの音紋を探知するまでパッシブ・ソナーを適当に投下し続けなければならないのだが……
「タコよりＳＳ１へ。これは――？」

国谷は眉をひそめた。

同刻　神奈川県横須賀市　国防艦隊司令部　中央指令所

その情報は国防海軍の全戦力の中枢であるここにも送られていた。

「参謀長、どう思う？」

国防海軍の全艦船及び航空戦力の位置を把握するために設置された大型スクリーンに表示される情報を眺めながら、国防艦隊司令官倉谷智弘大将は手前で自分と同じように、スクリーンを眺める参謀長に意見を求めた。

「まだ断言はできませんが、分析員の話によると十中八九、北の――」

その時、参謀長の言葉を遮るようにアナウンスが流れた。

「情報部より分析結果。対馬沖で第一航空隊籍Ｐ―３Ｃクローム０６がキャッチした音紋は、北朝鮮製ヨノ型潜水艇のものと一致。繰り返す――」

それに機敏に反応し、参謀長が倉谷に振り向く。

「司令！」

倉谷はそれに応えるように命令を下した。

「当該海域に所在するすべての艦船の演習の即刻中止！　北朝鮮潜水艇に対処せよ！」

二二四八時　東京市ヶ谷　国防軍参謀本部

「……そうか。うむ、わかった。すぐに危機管理センターに」

そう言って受話器を置くと、国防軍参謀総長である雁屋智英国防空軍大将は執務室を飛び出した。

そして国防省の地下駐車場へ向かうと、防弾加工の施した公用車が待機していた。

雁屋が公用車に乗り込むと、すでに中には副参謀総長と国防情報庁の長官が座っていた。

雁屋は「すまん」と自分が遅れたことを詫び、車の座席に座った。

三人が乗った事を確認すると、運転手の若い下士官はアクセルを踏んだ。
その後を追うように、もう一台の公用車も発進する。こちらの公用車には国防陸海空三軍それぞれの総司令官が乗り合わせていた。

対馬沖　「らいごう」
「そうですか……。分かりました」
そう言って加賀山は衛星電話の受話器を置くと、部下への新たな命令をヘッドセットに吹き込む。
「演習を中止。並びにリンク１６を復旧せよ」
その加賀山の言葉に「らいごう」の乗組員たちの間に、どよめきが走る。
「中止！？」
「うそだろ……」
ほんの数分前、突如として、舞鶴鎮守府から嵐のようなＵＬＦ（極超長波）通信とＶＬＦ（超長波）通信で、〈浮上せよ〉の命令を下された「らいごう」は演習終了一〇分前にして、泣く泣く海上へ浮上したのだった。その後、鎮守府に衛星電話で事実関係を確認した。
加賀山は乗組員たちのどよめきを手で制しながら話を続けた。
「落ち着いて聞いてほしい。今から一五分ほど前、クローム０６が北朝鮮籍の潜水艇を発見した」
次の瞬間、どよめきが沈黙に変わった。
「本艦はこれより領海防衛活動の範疇で、北朝鮮潜水艦の領海侵犯に対応する」
加賀山のその言葉で「らいごう」の乗組員たちに緊張が走った。
これが実戦になるのかも知れないという恐怖がそうさせた。
加賀山はそんな乗組員たちを叱咤するように命令を下した。
「艦橋、潜行用意！」

対馬沖上空　クローム０６
クローム０６は今、マザーベースの鹿屋航空基地に帰投しようとしていた。
「機長！　何でここで帰るんですか！」
国谷は機長に噛みついた。
「そうは言っても、基地司令からのお達しじゃあ仕方が無いだろ？」
「ですが――」
「それにだ」
機長は国谷をなだめるように言った。
「魚雷をぶち込むだけが俺たちの仕事じゃねえ。人生ってのには引き際が肝心なんだ。『二兎を追う者は一兎も得ず』。美味しいところは大村の連中にくれてやれ」
そして国谷がすっかり大人しくなったのを確認すると機長はヘッドセットに大声を叩きこんだ。
「ようし、この件が一息ついたら基地の連中と浴びるほど飲むとするか！」

二三〇〇時　霞が関　危機管理センター（内閣非常事態情報集約センター）指令所
今ここには、国防軍参謀総長や国防三軍の総司令官といった、そうそうたる面々が集まっていた。
「新田総司令官。状況を」
国防軍参謀総長――国防軍軍服組のトップである雁屋は、国防海軍総司令官新田文博大将に状況の説明を求めた。
「は、本日二二三〇時頃、対馬沖にて国防海軍第一航空隊隷属のＰ－３Ｃ哨戒機と、第一潜水隊隷属のらいごう級潜水艦『らいごう』とが演習の最中、Ｐ－３Ｃが領海内において国籍不明の潜水艇を発見。ほぼ同刻、国防艦隊司令部の情報部の分析の結果、この潜水艇は北朝鮮製ヨノ型潜水艇であることが判明しました」
その瞬間、将軍クラスの階級章を付けた男たちの間に緊張が走っ

た。
間違いであってほしかったが、やはり、か。
雁屋はセンター内に設置されている大型スクリーンに目を向けた。スクリーンには、北朝鮮潜水艦とそれに対応する国防海軍の部隊の位置情報を、リアルタイムで映し出している。
ここには国防軍だけではなく、警察や消防といった日本国内の平和と公共の安全を担う組織の、あらゆる情報がリアルタイムで収集され、分析されていた。
「皆、これをどう思う？」
雁屋は誰ともなく聞いた。
「この件に関しては、私からお話が」
国防情報庁の長官だった。長官は車椅子のジョイスティックを操りながら、話の輪に近づいた。
「みなさんは北の指導者が人民軍のテン・リファ大佐であることは、ご存じですね？」
北朝鮮では第二次朝鮮戦争以降、指導者は軍内部から選挙で選ばれることになっていたが、往々の農業の不作や、経済の衰退による国民の反感を一身に背負う指導者になることを誰もが嫌がっていた。
そんな中、指導者に立候補したのが政治将校のリファだった。
リファは就任直後、農業の改革政策や国内の豊富な水資源を盾にした大陸向けの水ビジネスの根幹を作りあげることに貢献した。まさにカリスマと呼べる存在だった。
「ああ、もちろんだ。それで？」
国防空軍総司令官の土神敏雄大将は長官に次を促す。
長官はそれに頷くと先を続けた。
「しかし北の軍内部では、リファのことを快く思っていない者も少なからずいます」
長官はそこまで言うと、給仕兵の持ってきた茶を啜り、話を続けた。
「リファは政治家としてこそ優れてはいますが、軍事の方面はから

きしで、つい最近まで米軍のＢ―５２爆撃機が空母に艦載できるものと勘違いしているほどでした」
「それで？　早く要点を言ってくれ」
国防陸軍総司令官新井修一大将は焦れたように言った。
「これは失礼しました。以上のように、リファは軍事に疎く。また年齢も四十代前後と比較的に若いことから、軍の将校たちからは、はっきり言って舐められていると言ってもいいでしょう」
長官はそこで一息つくと、話を続ける。
「そしてリファは、軍が自分の意志に背いた行動を、はっきり言うと叛乱という形で自分に牙を剥くのではないかと恐れるようになりました」
「それでは今回の件は朝鮮人民軍の暴走だと？」
国防海軍総司令官の新田だ。
しかし、それは違うと言うように、長官は首を振る。
「逆です。軍の自分に対する求心力を高めるために、リファ自身が計画したテロだと見て間違いないでしょう」
将軍たちの間に流れていた緊張がピークに達した。
「これがテロとするならば、連中は対馬に上陸するつもりか」
これは国防陸軍総司令官の新井だ。
「いや、この針路は……長崎だ！　奴らは長崎の本島に向かっている！」
米国太平洋艦隊の旗艦に対し、次々と撃沈判定をたたき出した元エース潜水艦艦長の新田はそう結論付けた。
「国防海軍総司令官！　佐世保鎮守府の部隊に緊急出撃命令！」
「了解！」
新田は敬礼すると手前のコンソールに設置されている受話器を取り上げた。
「国防陸軍と国防空軍は、国防海軍部隊の支援に回れ！」
そう言われるや否や、新井は第四師団総監部に、土神は西部航空軍司令部に新田と同じように、電話で直接命令を下した。

慌ただしく動く三人の総司令官を見ながら、雁屋は国防情報庁の長官に問いかけた。
「北朝鮮の指導者への朝鮮人民軍軍部の不信感。それを払拭するためのテロ活動……。予兆はそちら（国防情報庁）で察知していたのでは？」
「はい」
「それならどうして、その情報をこちらに出さん？」
「この一件については、北に我々の工作員を潜入させ、『処理』する予定だったので、なるべく部外者には関知されたくはなかったので」
部外者？　部外者と言ったのか？　あまりの言いように、雁屋は激しい怒りを覚えた。
「それでは私も仕事に取り掛かります」
そう言うと長官はセンターの指令所から出て行ってしまった。
いつものことだが防情の独断専行は困ったものだ。と雁屋はため息をついた。
それから雁屋は指令所の常駐している尉官に声をかけた。国防軍最高司令官である内閣総理大臣の姿が見えないことが気になったのだ。
「総理は何故お越しになられないのだ？」
「キューバへ外遊中で不在です」
「何だと？　じゃあ副総理は？」
「総理のキューバへの外遊に同行していられるようです。後、官房長もご一緒に」
「国防大臣は？」
「副大臣と中国に」
情報機関とのいがみ合い。指揮中枢の重要人物の不在。これが日本の国防の現状なのか……。雁屋は頭痛でこめかみを押さえながらも尉官に問いかけた。
「この際、国家公安委員長でも……！」

「韓国で反日デモに参加しているとのことです」
勘弁してくれ……。正直、任務でなければ投げているところだ。
雁屋は天を仰ぎ、それからまた目の前のスクリーンに目を向けた。
――スクリーン上に映る北朝鮮潜水艦を表すマーカーが、殺気を滲み出すかのように、かすかに揺れた。

第七話（前書き）

遅くなりました！　感想をくださった皆さん、有難うございます！！

第七話

二三一五時　対馬沖　「らいごう」
「針路〇四五。深度二〇。最大戦速」
加賀山がそう指示すると「らいごう」の操舵士である古兵の先任伍長は、全長八五メートルの巨体を操ってくれる。
三ヵ月前の雪辱を果たすための采配がこんな所で功を奏すとは思いもしなかったと、加賀山は自分の強運に驚いていた。
初の実戦になるとあって、最初こそ動揺を隠し切れていなかったクルー（乗組員）たちだったが、今はいつもの訓練通りに動いてくれていた。
「前方、約二〇〇（二万メートル）に朝鮮人民軍海軍籍潜水艦と思しき艦影あり」
ソナーからの情報を映し出すディスプレイを眺めながら、ソナー員長（水測員長）は落ち着き払った声で報告してきた。
「速度、落とせ。八ノット」
「速度、落とせ。八ノット」
加賀山の指示は機関長を通じて機関士に伝えられる。
「人民軍の潜水艦で間違いないか？」
加賀山の問いにこちらに振り向きもせずにディスプレイを見ながら、ソナー員長は「間違いありません」と答えた。
国防軍が自衛隊と呼ばれていた時代から、水測一筋だった男が言うのだ。間違いはないだろうと思いながら加賀山は、次の命令を飛ばす。
「モールス準備。警告を行う。野郎の鼓膜を叩き割ってやれ」
「モールス準備」
「モールス準備」
加賀山の命令を復唱しながら、通信士である若い水兵たちは電子機器を操り、前方の北朝鮮の潜水艦に対しモールスを送る準備を手

際よく整えた。
「艦長。内容はどうします？」
航海長を兼ねる副長が加賀山に尋ねて来た。
それから、加賀山の言葉通りのモールス信号が海中を伝わり、北朝鮮の潜水艦の艦体を震わせるのに、一分も掛からなかった。
〈こちらは日本国国防海軍隷属潜水艦「らいごう」。朝鮮民主主義人民共和国籍の潜水艦に警告する。貴艦はすでに日本国の領海内にいる。敵意が無いのであれば直ちに浮上されたし。浮上の意思が確認できない場合は、貴艦を攻撃することもありうる。直ちに浮上されたし。繰り返す……〉

首相官邸　危機管理センター
場は殺気立っていた。
「総理とまだ連絡はとれんのか？　早くしろ！」
「そうだ！　大使と連絡を――！」
「寝てる？　阿呆が！　叩き起こせ！」
「参謀総長！」
最高司令官である総理大臣たちとの連絡が取れず、混乱の渦中にある危機管理センターの騒乱の中で、国防空軍総司令官の土神敏雄大将は国防軍参謀総長雁屋智英大将に迫った。
「陸海空とも臨戦態勢を整えています！　この際、我々の一存で――！」
「気でも狂ったか！」
雁屋に食ってかかる土神に、副参謀総長は目を剥いた。
「そんな勝手が許されるとでも思っているのか？　文民統制を知らんお前でもあるまい！」
しかし土神は逆に副参謀総長に噛みついた。
「お言葉ですが副参謀総長。このままでは前線の兵士はおろか長崎にいる市民も危険にさらされることになる。そんなこともわからんのかアンタは！」

語気激しく副参謀総長に噛みつく土神を、国防陸軍総司令官の新井修一大将は「落ち着け」と慌てて羽交い絞めにした。
「ふざけているのか貴様は！　これは遊びではないのだぞ！　軍隊が命令も無く勝手に動けば――それも軍事活動を行えば世間はどんな反応をするのかは、お前も分かり切っていることだろう！」
副参謀総長は決して臆病な軍人ではなかった。
しかし違憲の存在として旧自衛隊が忌み嫌われ、自衛官はおろかその家族にさえも差別の嵐が吹き荒れていた時代を知る人間としては、土神の言動を黙認するわけにはいかなかったのだ。
自衛隊は真の国防組織としての地位を確立するために、七〇年代と九〇年代に二度のクーデターを敢行した。だが、その結果は国民の自衛隊に対する不信感を増長する結果終わり、自衛隊の風当たりはより一層、ひどくなった。
それは憲法を改正され、自衛隊が国防軍に昇格してからもしばらく続いた。
だが近年の自然災害派遣や国際支援活動などの活躍が広く世間に知られるようになり、国民の国防軍への信頼感は高まっていった。
――それなのに、これからという時に！
副参謀総長は大型スクリーンに映し出された北朝鮮潜水艦を示すマーカーを、親の敵のように睨んだ。
そんな副参謀総長の心情を知ったのか、土神は幾分に声のトーンを落として喋り出した。
「副参謀総長の気持ちも察します」
土神の態度の変化を読み取った新井は拘束を解いた。
「ですが私たちは国民の生命と財産を守るために存在している。あなただって世間のご機嫌を伺うために自衛隊に入隊したわけではないでしょう？」
「……」
「『国を守る』ためではないのですか？」
「国を守る」と言うと、右翼的危険思想に聞こえるかもしれない。

だが本来、「国を守る」とは、家族を、故郷を、友人を、その他諸々を守るという包括的な意味合いの言葉であって、決して戦争を肯定するだけの言葉ではないのだ。
「……」
副参謀総長の沈黙を自分の意見への肯定と受け止めた土神は、再び雁屋のほうに向き直った。
「参謀総長」
雁屋は二人を見比べ、そしてしばらく瞑目したが、やがて目の前のコンソールに備え付けられたマイクに口を開いた。
「現在時刻二三二〇時。参謀総長より各員へ」
危機管理センター内の空気が張り詰めた。
「現在、領海を潜航する北朝鮮潜水艦を領海侵犯艦船として認定する」
「！」
「参謀総長！」
領海侵犯というと、自国の領海内に他国の艦船が無断で侵入したことをもって犯罪とすると思われがちだが、国際法上の定義は全く違う。
それは国連海洋法条約においては、沿岸国であるかどうかを問わず、すべての国は領海内を通航する「無害通航権」が認められているからだ。
ただし自国の防衛又は安全に影響を与え得ると、認識できる場合はこれに限らない。
雁屋は北朝鮮潜水艦を、日本の防衛に支障をきたす事象であると判断したのだ。
海外の国では当たり前の対応だが、未だに軍隊へのアレルギーが蔓延する「大多数の平和を愛する国民」が、これをどう受け止めるかは火を見るよりも明らかだった。
「ただし攻撃に関しては、相手が攻撃を確認しない限りは、私の命令によって実施するものとする」

参謀総長は一人で責任を負う御積りなのか。
雁屋の力強い背中を見ながら、将軍クラスの肩章を付けた男たちは思わず涙があふれるの抑えられなかった。

対馬沖　「らいごう」
雁屋の言葉はＥＳＭアンテナを通じて、加賀山たちにも伝わってきた。
「参謀総長も思い切ったことをしたものだな」
加賀山は、おもしろいといった風に鼻を鳴らした。
「ソナー各位要員へ、敵のどんな動きも見逃すな」
「了解」
加賀山は次々と指示を飛ばす。
「魚雷発射管二番、三番、注水。発射準備」
「発射管二番、三番発射準備！」
「二番、三番準備！」
力強い復唱が艦内を駆け巡る。
「艦長」
各員の復唱を横目に、副長は加賀山に問うた。
「撃つおつもりですか？」
「敵が攻撃してきたならな」
加賀山はここで一息置いた。そして言った。
「もっとも、撃たないことに越したことはないんだがな」

キューバ　ハバナ　現地時刻一〇三〇時
「どういうことだ？」
男は貧相な唇を戦慄かせながら、携帯電話を握りしめた。
「北朝鮮の潜水艦が？　そんな、それは……」
男は癇が起きたように震えだした。
男の名は御手洗正武。日本国の第九六代内閣総理大臣だ。
今、御手洗はキューバの指導者に謁見するためにキューバの首都

ハバナに外遊に来ていた。
前日は夜遅くまで、指導者と盃をかわし続け、今の今まで高級ホテルの一室で眠りこけていた。そこに国防省からの報せが入った次第だ。
御手洗は安眠を妨害されたことに不機嫌になりながら、ＳＰから携帯電話をふんだくった。
だが携帯の向こうから飛び込んでくる情報は、眠気と酔いを爆砕するには十分すぎるものだった。北朝鮮潜水艦の領海侵犯。それに対する攻撃準備命令。御手洗は自分の心臓がまだ拍動し続けていることが奇跡のように思えた。それほどの衝撃だったのだ。
「そんな勝手が許されるとでも思っているのか！　攻撃をやめさせろ！　い、今すぐ！　今すぐだッ！！」
「しかし総理。敵はすでに長崎港沖の一海里を潜行中で――」
「敵？　敵だと？　君は、その、北朝鮮の潜水艦が、――敵だと言うのかね？　えッ、どうなんだ！」
国防省の官僚が必死に事情を説明するが、市民運動家上がりの男は喚き立てるようにそれを遮る。
「総理。北朝鮮の潜水艦はすでに日本の領海内を潜行中で、再三の警告にも従う素振りすら見せていないのです」
「もういい！　国防軍の……。そう、ええと、偉い奴に繋げ！」
「それは……。国防軍参謀総長の雁屋大将のことでしょうか？」
「そうだ！　そいつに繋げ！」
防衛庁時代からのベテランキャリアは、ため息をつくの何とかこらえた。
自国軍の将軍クラスの、しかも要職に就く軍人の名前を把握していない宰相など聞いたことが無い。
渋々、雁屋に電話を繋ぐよう官僚が後ろに控えていた部下に指示を下そうした時、手に持っていた受話器の向こうから、「待て！」と言う声が響いた。
「どうなさいました？」

うんざりした態度を悟られないよう注意しながら、受話器を握りなおした。
「私が直接、部隊を指揮しよう！」
「……は？」
官僚の鈍い反応に、焦れながら御手洗は畳みかける。
「だーかーらー。私が、今、その、国防軍を、いや、北朝鮮の潜水艦に対応している部隊を指揮しようと言っているんだ」
「総理それは、部隊の指揮系統に混乱をきたす恐れが――」
「よし、これで決まりだ！　阪神の時も町山おじさんはリーダーシップ云々で散々、叩かれたしな。うん。そうしよう」
御手洗は受話器の向こうから説得する官僚の言葉など耳に入っていないようだった。
「文民統制を何たるかを国防軍に知らしめてやる。ほら、早く現場の部隊の指揮官にこの電話を繋ぐんだ。急げ！」
「ですから総理。部隊の作戦に支障が――」
「うるさい！　私は国防軍の最高指揮官だぞ！　文句を言ってないで早く繋ぐんだよ！」
どうなっても知らないぞ。そう思いながら官僚は、御手洗の指示通り、現場の部隊に電話を繋いだ。
これでは文民統制ではなく文民干渉ではないか。そうは思いながらも総理の指示には逆らえないのは、官僚の悲しい性なのだろうか。

対馬沖　「らいごう」
「ターゲット（北朝鮮潜水艦）、反転を開始し始めました」
ソナー員の一人の報告で、艦内に緊張が走る。
「まさか、今になって引き返す気になったのか？」
「らいごう」艦長の加賀山大佐の問いに副長は答える。
「今まで警告に、従う素振りすら見せませんでしたし、それは無いかと。危機管理センターからの情報から察するに、先方は何が何でも『戦果』を挙げる気でしょうし――」

と、次の瞬間。先ほどとは別のソナー員が悲鳴を挙げる。
「タ、ターゲットが魚雷発射管を開き、注水を開始したようです」
「馬鹿な。上をシーホークが飛び回っているんだぞ。自殺行為だ！」
シーホークとは国防海軍が装備するＳＨ－６０Ｊ哨戒ヘリの愛称だ。
今、対馬沖の海上では大村航空基地から飛び立った第二二航空軍隷属のシーホーク部隊が、ターゲットの行動に目を光らせている。
もし不穏な動きがあれば、ターゲットにシーホークの短魚雷が殺到することになる。
「『何が何でも戦果を挙げる』。か……」
先の副長の言葉を反芻しながら、加賀山は数瞬、瞑目した。
そして命令を下す。
「これより正当自衛攻撃を行う」
その言葉に副長以下、発令所に詰めるクルーは、ギョッとしたように加賀山の方を振り向いた。
「艦長……」
「撃沈するのですか？」
加賀山は部下の逡巡を収めるように言葉を紡ぐ。
「私が指揮官として責任を負う。だから攻撃せよ」

危機管理センター
「攻撃？」
危機管理センターの発令所にいる高級将校たちは、国防海軍総司令官の新田大将のその言葉に何も感じるものは無かった。
ただ、来るべきものが来たという風にしか感じられなかった。
「『らいごう』に繋げ」
雁屋参謀総長はコンソールに座る若い士官に命じた。
一分も経たないうちに「らいごう」と通信がつながる。
「国防艦隊第一潜水艦隊隷属『らいごう』艦長の加賀山です」
「こちらは国防軍参謀総長の雁屋だ。貴官は敵潜水艦を攻撃するこ

とができるか？」
「はい。このままでは我々の身に危険が――」
「私が聞いているのは『攻撃できる』のか、『攻撃できない』のかだ」
雁屋のその問いに加賀山は即答する。
「出来ます。そのために身を粉にして訓練に勤しんできたのですから」
その言葉に納得したように頷くと雁屋は命令を下した「。
「国防軍参謀総長として命じる！　直ちに敵潜水艦を撃沈せよ！」

対馬沖　「らいごう」
「目標、ターゲット！　攻撃武器、魚雷！」
「目標、ターゲット！　攻撃武器、魚雷！」
「こんごう」の兵装を操作を担当する古川早苗少尉は震える手で、キーボードに座標を入力する。
それなりの使命感を持って、国防大学を経て国防海軍に入隊した早苗だったが、「人を殺す」という重圧に、やはり押しつぶされそうだった。
ふと肩に温かい感触が広がった。後ろを見やると、加賀山が「大丈夫か？」と、こちらを気遣うように手を置いていた。
それだけで早苗は勇気づけられた。はたから見れば、加賀山の行動は緊張の重圧に押しつぶされそうな部下を気遣うような仕草に見えた。
だが実際はそのようなものではない。
はっきり言うと加賀山と早苗は男女の関係にあったのだ。それは親と子ほどの年の差はもちろん、加賀山は既婚者であったので、お世辞にも世間体に良いとは言えない関係だった。
「大丈夫です」
それだけ言うと、早苗は兵装操作用のディスプレイに向き直った。
「魚雷発射準備よし。いつでも撃てます」

加賀山はその言葉を反芻した。
そして、攻撃開始の命令を――
「国防艦隊司令部より各部隊へ緊急入電！」
通信士が怒鳴り散らした。

危機管理センター
その場は修羅場という表現ではまだ足りないほど混乱していた。
「どういうことだ！」
「わかりません。ただ国防艦隊司令部は総理の命令だとしか……」
「かわれ！」
あたふたとする若い士官から、雁屋は電話の受話器をもぎ取った。
電話の相手は国防艦隊司令官の倉谷智弘大将だ。
「なぜ攻撃を中止命令を出した？」
「それが先ほど、国防省からの連絡で……」
倉谷の話によれば、つい先ほど国防省を通じて御手洗総理が自ら陣頭指揮を執ると言う旨の、報告をしてきたそうだ。
「それで？　総理はどのような命令を？」
「それが……。国防軍は決して武器の使用をせず、実力行使に際しては海上保安庁に一任すると……」
「たわけが！」
雁屋がそう口汚い言葉を吐いたその時、受話器の向こうで倉谷が叫んだ。
「あ！　撃った！」
「どうした？　何があった！」
「攻撃です！　敵潜水艦が『らいごう』に魚雷を発射した模様です！」
慌てて危機管理センターに備え付けられている大型スクリーンを振り返った。
新たなマーカーが魚雷の軌道を示す点線を描きながらスクリーンの上を移動していた。

――その先には……

対馬沖　「らいごう」

「方位〇四〇より敵魚雷接近！　数三！」

「緊急浮上開始！　攻撃対象を敵魚雷に切り替えろ！」

加賀山は的確な命令を下す。

敵の魚雷への対処方法は意外に少ない。

一つはディーゼル並びにバッテリー潜航を停止し、魚雷の弾頭部に積載されたアクティブ／パッシブソナーを失探させる方法。

もう一つは敵魚雷を直接、攻撃して破壊する方法だ。

前者は敵魚雷がジャイロスコープと連動して制御されているのなら、ソナーが失探させたとしても大体の目標の位置に誘導されるだろう。さらに磁気感応信管が反応すれば、ズドンだ。

ならば多少、荒業だとしても敵魚雷を攻撃し破壊する方が確実だと加賀山は直感したのだ。

「予測座標入力よし！」

「シュート！」

「シュート！」

魚雷がガス圧で発射管から海中に押し出される音が響く。

「目標まで後、一〇、九、八――」

「魚雷自爆準備！」

「自爆準備！」

「三、二、一――」

「自爆！」

漆黒の海中に閃光と共に火玉が形成された。

魚雷の弾頭に積載された炸薬はカタログデータ通りの効能を発揮した。

炸薬の爆発エネルギーは海中でバブルジェットの刃に変わり、三本の敵魚雷に襲いかかる。

「やったか？」

加賀山はソナー員長に畳みかける。
「――ッ。一本、破壊し損ねたようです！　まっすぐこちらに来ます！」
「総員、対衝撃体勢！」
「対衝撃体制！」
復唱がこだまする中、十二分に敵との距離を確保しなかった。自分の無策を呪った。
次の瞬間、おぞましい衝撃波が「らいごう」を襲った。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5803w/

防人の唄

2011年10月26日02時00分発行